

陀田勘助も往復したであろう、関東大震災からの復興途上にある 1920 年代末の隅田川 5 橋



陀田勘助 だだ・かんすけ 1902 - 1931 大正・昭和時代前期の詩人、労働運動家。明治 35 年 1 月 15 日生まれ。大正 12 年松本淳三らと「鎖」を創刊、「悍馬」「無産詩人」などに参加。アナキズム詩人として活躍するが、のち労働運動に専念。昭和 3 年共産党にはいり、東京地方委員長となるが検挙され、昭和 6 年 8 月 22 日豊多摩刑務所で獄死。30 歳。38 年「陀田勘助詩集」が刊行された。栃木県出身。開成中学中退。本名は山本忠平。小林多喜二ら北海道出身の活動家とも直接、間接に関わってきた詩人の生涯を通じ、大正・昭和初期の文学に少なからぬ影響を与えたアナキズム文学の一端を紹介する。

吉田美和子著『ダダ・カンスケという詩人がいた——評伝陀田勘助』(共和国)が、本展会期にあわせて刊行。

無名は有名のやうによごれてゐない 陀田勘助 1923 年

吉田美和子

隅田川を渡ると、運河の上にはいつも同じかたちの雲が浮かんでいた。地形や気流の関係で、同じ時刻には同じ雲が出来るのだろう。この川はどうちに流れているんですか、と釣りをしている人に尋ねたら、どうしてそんなことを訊くんだと怪訝な表情であった。潮位の関係で運河の水は行ったり来たりすることを、私は知らなかつた。江東というこの土地に私はよそ者であつたけれど、そのひろがりをあてもなく歩き回るのが好きだつた。

江東の詩人『陀田勘助詩集』を開くと、どの詩もあまり面白いとはいえない、困て本を閉じる。どうしてダダ・カンスケなのか? — とみんなに訊かれるからだ。説明はしにくい。むかし遠い親戚にそんな青年がいたんですよ、みたいな気分だからである(事実ではない)。だれも知らないから、せめて自分だけでもちよつと肩を持つてみようか、というだけのことなんんですけど。たいした詩は書いていないんですけどね、殺されちゃつたんですけどね。

「無名は有名のやうによごれてゐない」。陀田勘助は詩誌『鎖』創刊号のあとがきにそう書いた。1923 年(大正 12 年)関東大震災の直前である。この未曾有の災害に前後して前衛美術家集団「M A V O」や『赤と黒』の詩人たちの反逆的な表現活動が始まった。詩行為を詩展のパフォーマンスとして展開する試みは現代にも通じるだろう。陀田勘助はそのいちはやい一人であつたけれども作品はわずかしか残っていない。彼はたちまち詩を棄て労働運動、非合法活動に没入してゆくからである。1931 年には獄死している。小林多喜二虐殺の 1 年半前であつた。

だから私は陀田勘助の詩にといふよりは、あの時代の凄さから目が離せなくなつたのかもしれない。(かいと)龜戸事件、ギロチン社事件、どこをつづいても火炎や濁流が噴き出して、私の手には負えなかつた。そのとき私たちはどう生きうるのだろうか。

いま、陀田勘助の横顔が半分しか見えないことで、かえつてその存在が懐かしいものになつてゐる気がする。おぼろなシルエットは私たちに投影を誘う郷愁を誘うからである。今回の市立小樽文学館展は、そうした無名者たちの北海道との交流の陰翳も、示されるだろうか。

『アナキスト詩人・陀田勘助展』2022 年 7 月 2 日(土)~8 月 7 日(日)

公式 Twitter で最新情報発信中!

開館時間 9 時 30 分~17 時(入館は 16 時 30 分まで)

休館日 毎週月曜日(7 月 18 日を除く)、7 月 19・20 日(火・水)

会場 市立小樽文学館(〒047-0031 小樽市色内 1-9-5 電話 0134-32-2388) 無料展示スペース

